CELからのメッセージ

「都市の景観」

大阪ガス エネルギー・文化研究所所長
安達 純
WRITTEN by JUN ADACHI

柳田國男の風景論

日本民俗学の祖と呼ばれる柳田國男は、昭和の初めに「明治大正史 世相篇」を著し、自らが生きてきた時代の世相を独自の視点から論じた。歴史とはふつう、選ばれた英雄たちの心事を説いたものを指すが、柳田のアプローチはそれとは違って、一般大衆の日常生活の移り変わりや、その底に流れる心の変遷の中に歴史を見い出そうとするところに独自性があった。

「明治大正史 世相篇」のどのページを開いても、私たちはたちまち柳田ワールドに引き込まれる。けれども先ずはこの本の構成どおりに、"眼に映ずる"ものや"耳に聞く"世界から入っていくことにしよう。

例えば「時代の音」という項で柳田は、天然の恵みによって与えられた音ばかりでなく、人が新たに作り出したものにも"耳を澄まし"て、次のように言う。

昔は縁の下に蟻が角力をとる音を聞いたという話がある。それほどでなくとも心を静めて聞けば、まだまだ面白いいろいろな音が残っている。聞き馴れて耳に留まらなくなったのは、叢(くさむら)の虫、梢の蝉だけではなく、清らかなるものの今や稀になったのは、野鳥の囀りのみでもないのである。新たに生まれたものいたって小さな声にも、心にかかるものは多い。ある外国の旅人は日本に来てことに耳につくのは、樫の足駄の歯の舗道にきしむ音だと言った。しかり、これなどは確かに異様である。そうしてまた前代の音ではなかった。

私たちの日常生活ではめったに聞かれなくなったが、足駄の舗道にきしむ音は、当時はむしろ新しい音であったのである。「明治大正史 世相篇」では、例えばこのように、色や音、味、香りといった人間の五感で捉えられた印象が語られ、その変化から人々の心のありさまや、それを取り巻く家や社会の変遷が描き出される。

"風景"についても一つの章が設けられている。少し長くなるが、柳田自身の文章を引用してみよう。

人はとにかくに非常に風景というものを心安く、かつ自由に楽しむことができるようになった。それはいずれもみな明治大正の世の、新しい産物と言ってよいのである。ただし欠点を強いて挙げるならば、これほど親密に我々の生活に織り込まれているものを、まだ多くの人は自分の物とまでは思っていないことである。衣食や住宅を楽しくするように、これを人間の力で統御することが、できないもののごとく諦めている者がまだ多い。従うて何が新たに生まれた美しさで、何が失われた大切なも

のであるかを、ほんのわずかな人だけに考えて貰おうとしている。しこうして単なる無関心のために、不必要に未来の幸福を壊そうとしているのである。特に進んで風景を作り立て、もしくは選び定める技術は拙劣であったにもかかわらず、こういう破壊力の方は人が増すとともにいよいよ猛烈になった。それを争わんとする者はほとんど皆、昔からの趣味に囚われた人ばかりで、この仲間はまた生まれて成長するものをさえ憎んでいるのである。そこで風景の批評は混乱することになった。旅を夢中でして、名所ばかりを尋ねている者が、いつの時代になっても数多いのは、そんな面倒な観方を学んでいる余裕がないからである。

ここで言われていることを、もう少しわかりやすく箇条書きすると次のようになる。①風景が一部の人のものだけではなく、誰でもが楽しめるものになった。②しかし、風景を自らがつくっていくものと考えるのは少数で、大多数は風景に対して受け身である。③人口が増えるに従って、風景を制御し、あるいはこれをつくっていく力よりも破壊する力の方がまさってくる。④この風景を破壊する力に抵抗しようとする人は大概、旧来の"名所"を重んじる人であるので、新しいものを毛嫌いしがちである。⑤このような状況の中で、時代時代にふさわしい風景をつくっていくためには、"面倒な"思考と手続きが必要である。

柳田國男は、「豆の葉と太陽」という別の著書で、美しい風景とは世に知られた名勝ばかりにあるのではなく、季節とともに変化する農作物の色調の推移の中にも見出すことができるのだ、と述べている。今では時代が変わって、農村がわが国の美しい風景の一つであることを否定する人はいない。しかし、当時は名所や著名人が推奨した特定の風景が美しい風景とみなされていたのである。そうした風潮の中で、人間の生活が営まれている場所こそ美しいという柳田の考えは斬新なものであった。柳田にとっては、風景は時代とともに動いてゆくものであり、人の手によって育てられてゆくべきものであった。柳田はこれを「風景の成長」と呼び、風景は「悪くすることができる位なら、考えたら良くすることもできるはずである。破壊はできるが建設は望めないということはないと思う。」と言っている。

都市の景観

このように柳田の風景を見る眼は、その時代の大多数の民衆が生活の基盤とし

た農村を視野に入れていた。そればかりではない。その眼は、新しく興りつつあった都市にも向けられていたのである。もっと正確に言えば、農村のさらに向こうにある都市にも視線が届いていたと言った方がよいかもしれない。柳田の言うように農村も人の手によって生み出され育てられてきたのであるとすれば、都市はそれをもっと推し進めたものであり、人工の極致と言えるものであろう。柳田は「明治大正史　世相篇」で、都市の風景について次のように述べている。

　都市は永遠にここに住み付こうという意気込みの者が、多くなって行くとともに活き活きとしてきた。一つ一つとしては失敗であった建築でも、それが集まった所はまた別に一種の情景をなしている。あるいは片隅に倦み疲れたような古家が残り、もしくは歯の抜けたように空地が入り交り、それから見苦しいものを強いて押し隠して、表ばかりを白々と塗り立てた偽善ぶりを、憎もうとする者があるだろうが、同情ある者の眼にはこれも成長力の現れであり、かつこの上にもなお上品なる趣向を、働かせ得べき余裕である。正直に言うと明るい昼間の光で見れば、まだまだ目障りになるものがいろいろあるのだが、少なくとも夜の燈火の色の美しさだけは純である。これだけは確かにこの世紀に入ってから、人が老いたる天然に寄贈した、親切なる贈り物と言うことができる。この魅力は多くの若い訪問者に向っても、かなり強烈に働きかけている。人はこれあるがために永く遊ばんとし、また寄り合ってさらにこの土地を修飾しようとする。そうしていろいろのかつて愛せられた情緒を、無造作に忘れ去ろうともしている。すなわち都市の風光もまた推移しつつあるのである。

　柳田の著書を読んで厳密に論理を辿ろうとすると苦労を覚えるところがある。柳田の思考が屈折しているからだ。しかし、振り返れば私たちの日常の思考そのものが屈折しているのであって、そう考えると、柳田國男の論理はむしろ自然体に近いと言えるのかもしれない。ここもまた、若干の補助線を引いて整理してみる。①農村から都市へと出てきた人々にとって、都市は初め腰かけ的なものであった。しかし都市は、永遠にここに住みつこうという意識の人が多くなるとともに活き活きしてきた。②もちろん新しくできた風景に目障りなものもある。しかしそれも成長力の表れであり、都市を訪れる若者には大きな刺激を与えている。

それがあるからこそ都市に人が集まり、より活性化させようという気にさせるのである。風景を上品に整えることは、次に来る課題である。③一方で、古くからの情緒は忘れ去られる運命にあるが、それもやむを得ないところがある。都市の風光(風景、景観)も移りゆくものなのだ。

柳田は古くから伝わるものに対する愛惜の念も人一倍強かった。しかし、もっとも重視したのは一般人にとって今、何が必要かということ、その生活を活き活きとさせるものは何かという視点からものごとを考えることであった。そしてそれは、外から与えられるものではなくて、人々がその気になって集まり協力してつくりあげていくべきものであった。都市の風景もまた、そのようなものとしてあり、「土地の美観というものは、多数の意思を集めて、はじめて成り立つ」ものであった。

さらに柳田は、「鉄の文化」について次のように述べ、技術や文明もまた風景を構成する重要な要素であると指摘している。

いわゆる、鉄の文化の宏大なる業績を、ただ無差別に殺風景と評し去ることは、多数民衆の感覚を無視した話である。たとえば鉄道のごとき平板でまた低調な、あらゆる地物を突き退けて進もうとしているものでも、遠くこれを望んで特殊の壮快が味わい得るのみならず、土地の人たちの無邪気なる者も、共々にこの平和の撹乱者、煤と騒音の放散者に対して、感歎の声を惜しまなかったのである。これが再び見馴れてしまうと、またどういう気持ちに変わるかは期しがたいが、とにかくにこの島国では処々の大川を除くの外、こういう見霞むような一線の光をもって、果てもなく人の想像を導いて行くものはなかったのである。

ところで、これまで柳田の用法に従って風景という言葉を使ってきたが、柳田の風景は、現在言われるところの景観とどんな関係にあるのだろうか。風景は天然の恵みに近く、景観はこれに加えて人工物も含むと言うのが、現在の解釈である。すると、今まで見てきたように柳田の風景は人工物を含んでおり、その意味では現在の景観に相当すると考えてよい。しかし、そればかりでもなさそうだ。柳田の強調点は、生活の裏打ちのあるものこそ美しい景観を形成するということであり、これは、むしろ未来の景観論を先取りしていると考えるべきではないだろうか。これからの景観のあり方を考えるとき、柳田國男の風景論から学ぶべきことが多いと思う。

これからの景観

都市景観行政の分野では現在、セカンドステージを迎えていると言われている。都市景観行政は、先ず一九六〇年代の後半に、歴史的街並みや歴史的地区の保全に対する取り組みから始まった。次いで景観行政の主眼は、街並みに代表されるような都市の"美顔術"にウェイトを移し、そしてさらに現在の景観の議論は、都市のアメニティを支える都市活動（都市空間の利用や賑わいなど）までをその対象とするようになった。

そして、景観よりももっと包括的な概念である都市デザインとしての取り組みへと変化してきていると言う。

その背景には、私たちの価値観が「量」から「質」へと変化してきたことがある。これまでの機能性や経済性を追求した物質的豊かさから精神的豊かさ、つまり生活の質を重視する方向へと私たちの意識が変わりつつある。そうした中で、都市景観の対象も都市を構成する自然や人工的につくられた物的施設など都市の視覚的側面から、賑わいなどの都市の様々な活動や市民生活を反映した雰囲気や文化的香りなど視覚以外の領域を含む幅広いものに変化しているのである。このように都市をめぐる価値観が多様化し、私たちの意識が変化している中で、よりよい景観を形成していく上で何を基準としたらよいのであろうか。

その答えは簡単に見つかりそうにはない。しかし、「生活にとっての風景（景観）」という柳田の考え方は、基本原則として大いに参考にすることができると思われる。

もう一度、柳田國男の風景観のポイントをまとめてみよう。

①生活者にとっての風景という視点の重要性（誰にとっての景観か）

②都市に住み付こうという市民、より住みやすい地域にしようという住民が増え、協力して行動を起こすこと（景観・まちづくりの担い手）

③風景は成長する（不断の努力）

今から七〇年も前に、柳田國男は未来を先取りした風景論を提起した。しかし、「実際は市民の生活にとって必要なものが、今はまだ求められずにいる」とも述べ、その風景論が実践されることの難しさも同時に吐露している。

今も状況は変わらない。もっとも大切なのは、市民や事業者など都市や地域の構成員が、生活者としてそこに住み付こうという積極的な意志を持つことなのではないだろうか。